明石信道の「地縁的建築」 －新宿に建てた４つの建築を事例として－

2015.11.09　卒業論文発表会
中谷研究室＜千年村＞研究ゼミ
1X11A112-1 永田奏

第一章　序論

■研究目的

本論文は、**長谷川堯[1]が述べた＜建築家・明石信道の建築が、ある地域にとってなくてはならない「地縁的建築」である＞**ことを文献調査とヒアリング調査によって**立証し、「地縁的建築」の地域への作用とその作られ方を明らかにする。**

「地縁的建築」とは評論家の長谷川堯が「建築家としての明石信道」[2]の中で明石の建築について述べた言葉である。長谷川は、「組織と組織」で建築を建てられることが主流であった時代において「**人と人との結びつき**」を重視し「**限られた地域と密着していくことになった**」と述べている。またその結果、その建築はその場所になくてはならない「地縁的建築」を作り続けて来たと述べた。

実際に明石は新宿という特定の地域に４つの建築（武蔵野館、新宿帝国館、新宿区役所庁舎、安与ビル）を建てている。本研究ではこの４つの建築の時代背景とそこに関わった人などの事実を調べ**長谷川の＜明石信道の建築は「地縁的建築」である＞を立証する**。また、明石の建築に対する考え方などから「地縁的建築」の作られ方を明らかにする。

■研究方法

建築物の図面、当時の地図、文献資料を用いて明石信道とその建築物、及び背景を調査した。文献には、図面や竣工パンフレットなど表向きの資料とその建築に関する記述やオーラルヒストリーなどの資料の両方を扱った。さらに明石やその建築にゆかりのある方から話を伺った。

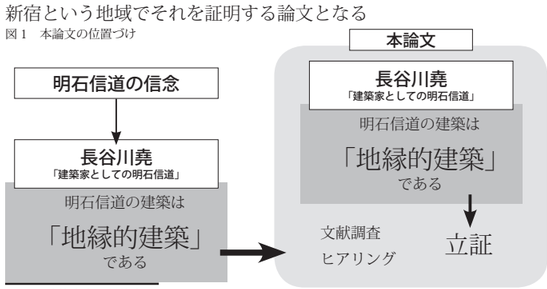
聞き取り▼

1. 相田武文氏（2015.9.20）
   1963 年明石研究室在籍。
2. 阿部幸正氏 (2015.9.21)
   稲門建築ライブラリーで明石を扱った。
   またその際、『旧帝国ホテルの実証的研究』で使用した図面を発見し修復。それらを帝国ホテルで展示した。
3. 明石乗二氏 (2015.9.21)
   明石先生の二男。
4. 安田眞一 (2015.10.21)
   安与ビルの施主・安田善一の長男。現安代ビル社長。

■本論文の位置づけ

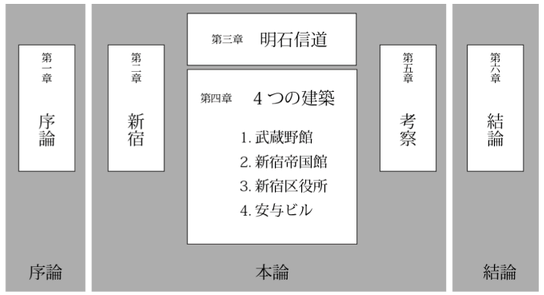
現段階でいわゆる明石信道論は長谷川堯の「建築家としての明石信道」のみである。長谷川は明石の残した論稿を元に、＜明石の建築は「地縁的建築」である＞という主張した。本論文はこれを元に、新宿という地域でそれを証明する論文となる

図１　本論文の位置づけ



1　建築史家・評論家。1901 ～
2 「明石信道作品集」刊行委員会『明石信道作品集』新建築社、1989 年

■本論文の構成



第二章　新宿文化の土台

■新宿の歴史

1699 年、追分（伊勢丹のある交差点）の地に、宿場町「内藤新宿」が開設されるとたちまち色町となり繁栄する。1885 年に駅が開設すると新宿駅東口方面に商店が出来始め、1923 年の関東大震災を機に下町から人が集まりにぎわいだす。駅のターミナル化も伴い大通り沿いにデパート、工場、料理屋、カフェー、映画館、宿場町時代の名残である遊郭などが人を集め一大繁華街となる。その後戦争で焼け野原となるも、すぐに闇市がたち、焼け残りの隙間には無数の飲み屋や露店が立ち並び復興が始まった。その後さらに交通網は拡張し、歌舞伎町や地下街の完成などで新宿は更に発展を続ける。現在は南口方面の再開発が進められている。

■新宿の文化

こうした歴史の中で、各時代でそれぞれの文化を生み出して来たが、結果としてその流れは途絶えず現代まで続いていると言える。遊郭は二丁目を経て現在は歌舞伎町で受け継がれている。昭和に増えたデパートや映画館なども現在も新宿の特徴である。無数のバー、飲み屋、飲食店も昭和から重要な新宿の産業の一つである。平成に入り都庁が移転し新都心となってからはビジネス街も生んだ。いずれの時代においても新宿は常に多種多様の人を集めている。

第三章　明石信道の信念

本章では明石自身についてを明石本人の文章、他人が明石について書いた文章、そしてヒアリングの３つの調査から述べた。

■生い立ち

明石は 1901 年函館に生まれ、伯母の学資援助を受けて早稲田大学建築学科へ進学する。その後建築家としてしばらく自営を続け、1940 年からは早稲田大学の講師となる。1952 年からは教授となり研究室も発足し、晩年にはフランク・ロイド・ライトの設計した旧帝国ホテルの実測にその情熱を注いだ。これは建築学会学会大賞を受賞した。1986 年新宿で死去。

■建築家として

明石の設計方針は極めて現実志向であった。幼少期には絵画や音楽に傾倒した明石だったが、建築学科に進み構造や設備の授業を受けると建築は広範囲を扱う学問であり芸術ではないということを自覚する。これを機に造形的な部分だけではない現実的要素も重視するようになりそれは生涯貫かれる。本人が残した文章にも意匠やコンセプトなどについて言及するものは極めて少なく、ヒアリングでもプラグマティックな建築家であったという証言が得られた。しかし建築設計に対する情熱を語るものは多々あり、建築は人と人とのつながりが第一であること、その建築に関わる人がみな情をもってつくることが大切だと説いた。ヒアリングでも文献でも、明石は頑固でおっかなく信念を曲げないような人物であったこと、また建築に対する情熱を晩年まで持ち続けていたことが分かった。

第四章　文献とヒアリングから分かる４つの建築

■武蔵野館（1928 年 -1966 年）

図１　新宿武蔵野館（1928 年竣工）

新宿の商店主たちが企画した新宿で初めての映画館の二代目。学生だった明石が一代目武蔵野館に通いつめ支配人と仲良くなったことから支配人に依頼され設計した。映画の殿堂と呼ばれ新宿において圧倒的な人気を誇り、同時に新宿を象徴するような建物だった。最新式の設備をそなえ一流の弁士と楽団を持つ武蔵野館のファンは多かった。空襲で焼け残りその後も運営を続けたが時代の流れにそぐわなくなり 1966 年閉館した。

■新宿帝国館（1931 年 -1944 年）

図２　新宿帝国館（1931 年竣工）

新興キネマの封切館としてオープン。その４年後には吉本興業が獲得し吉本の実演の直営館となった。1942 年には新宿花月劇場と改名された。その後建物疎開で取り壊されている。武蔵野館の評判を目の当たりにした人が明石に依頼したのではないかといわれている。

■新宿区役所本庁舎（1966 年 -）

図３　新宿区役所（1966 年竣工）

新宿区役所の二代目庁舎。構造を内藤多仲が担当した。もともとは新宿区が早稲田大学総長に相談をし、その結果内藤多仲が担当することが決定した。意匠を決定する際に内藤が明石に依頼した。また明石の長男・乃武も同様に意匠を担当している。3.11 震災を機に建て替える案もあがったが、免震工事をして使用が続けられることが決まっている。

■安与ビル（1968 年）

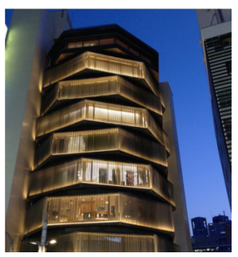


図４　安与ビル（1969 年竣工）

安与商事株式会社の商業ビル。先代の安田善一氏が父親である安田与一氏の記念塔として建てた。建てる際に川端康成氏の「新宿には大人の道草ができる場所がない」という意見から、「新宿で大人の道草を」をコンセプトにした商業ビル運営をしている。安田与一氏は明治期から戦後にかけて新宿東口界隈で成功した事業者。安田善一氏も新宿東口商工会の理事長を長年努められ、長男・眞一氏は現在新宿東口商店街振興協会の理事長である。善一の兄弟である安田与佐は明石の愛弟子であったことから、与佐を通じて明石が担当することになった。

第五章　「地縁的建築」を見る２つの視点

本章では地縁的建築かどうかを見る視点として、1) 個人的な人とのつながりがあるか、2) 地域において重要な存在となったかの２点に注目してそれぞれの建築を考察した。

■武蔵野館

1920 年に街の商店主たちが協力して発足させた新宿で初めての映画館である。当時発展しつつある新宿の街をさらによくするためだった。その後昭和初期から戦後までを通して、映画館はデパートやカフェーなどと並び新宿の文化と個性を作り上げた重要な存在であり、武蔵野館はその中心であり、一流の洋画の他にも一流の弁士と楽団をそなえ「映画の殿堂」の地位を築いた。発展していく新宿とそこに期待をもって訪れる人々の機運を、武蔵野館は体現していたといえる。また明石が常連として通う中で角間支配人との信頼関係が生まれ第二次武蔵野館の設計にいたった。

■新宿帝国館

まだ新宿の映画館が二館しかなかった 1931 年当時に建てられた新宿帝国館は、同年開館したムーランルージュとともに映画館建設ラッシュのきっかけとなった。戦争に巻き込まれたことは不運であったが、その７年間は新宿にとっても大事な映画館の一つとして存在したといえる。武蔵野館の向かいにあることから、武蔵野館の評判を聞いた人が明石に設計を依頼したのではないかという証言があった。

■新宿区役所

新宿区役所は言うまでもなく新宿にとってはなくてはならない建物である。新宿区政を支えていたことは間違いないが、人々にとってどういう存在であったか具体的に分かる資料には出会えなかった。地味ではあるが新宿区成立以来の大事なビルである。新宿区役所から早稲田大学総長へ、総長から内藤多仲へと設計の依頼が入った。内藤は構造専門なので意匠の担当者を決めるさいに、かねてから信頼をもって多くの仕事をしていた明石に依頼することは自然な流れであった。

■安与ビル

安与ビルを建てた安田一家は新宿東口と非常に深い関係があることが分かった。安田与一は新宿の発展の一要因でもあるデパートの一つ、伊勢丹を進出させ、割烹料理屋を開き駅前の繁栄に関わった。善一は意図せずとも新宿名物「缶詰ホテル」で各界の文化人を集めることとなり、新宿の文化形成の一端を担っている。現在三代目の眞一と尚史も先代の意思を引き継ぎ繁華街や盛り場だけではない新宿の文化を広め育てている。安与ビルはその全ての拠点となっている。明石が安与ビルを設計した背景には、明石の弟子・安田与佐が関わっている。与佐は施主・安田善一の兄弟である。ヒアリングでは与佐が明石の愛弟子であったことが分かった。

第六章　結論

明石が新宿に建てた４つの建築は、戦争に巻き込まれた新宿帝国館を除いてどの建築も息が長く、新宿にとってなくてはならない建築になった。よって明石の建築はいずれも「地縁的建築」であるといえ、長谷川の主張を立証できた。また、いずれも新宿と関わりの深い人を背景に持ち、それぞれの建築に携わる人物と明石との信頼関係を持って成り立っている建築だった。

目次構成

▶序章
第一章　序論
　第一節 はじめに
　第二節 目的
　第三節 研究方法
　　第一項　既往文献
　　第二項　ヒアリング
　第四節 論文の構成
▶本論
第二章　新宿文化の土台
　第一節 新宿の歴史
　　第一項　発生
　　第二項　明治期から関東大震災まで
　　第三項　昭和初期から終戦まで
　　第四項　戦後から現在まで
　第二節 新宿の文化
　第三節 小結
第三章　明石信道の信念
　第一節 生い立ち
　　第一項　建築学科に入るまで
　　第二項　建築家時代
　　第三項　教職時代
　　第四項　晩年
　第二節 建築家として
　　第一項　明石が書いた文章から
　　第二項　ゆかりの人物の書いた文章から
　　第三項　ヒアリングから
　第三節 人格
　　第一項　明石が書いた文章から
　　第二項　ゆかりの人物の書いた文章から
　　第三項　ヒアリングから
　第四節 小結
第四章　文献とヒアリングから分かる 4 つの建築
　第一節 武蔵野館
　　第一項　はじめに
　　第二項　資料から
　　第三項　ヒアリングから
　第二節 新宿帝国館
　　第一項　はじめに
　　第二項　資料から
　　第三項　ヒアリングから
　第三節 新宿区役所庁舎
　　第一項　はじめに
　　第二項　資料から
　　第三項　ヒアリングから
第四節　安与ビル
　　第一項　はじめに
　　第二項　資料から
　　第三項　ヒアリングから
第五節　小結
第五章　「地縁的建築」を見る 2 つの視点
　第一節 新宿の町の特性
　第二節 4 つの建築の持つ人の縁
　第三節 4 つの建築の新宿における存在
　第四節 小結
▶結論
第六章　結論

■図版出典

図 1　『東京国立近代美術館』http://www.momat.go.jp/fc/digital-gallery/dg20131217_005/（2015.7.29 閲覧）
図 2　『東京国立近代美術館』http://www.momat.go.jp/fc/digital-gallery/dg20131217_005/（2015.9.22 閲覧）
図 3　『新宿駅周辺』http://tamagazou.machinami.net/shinjhukuekishuhen.htm（2015/9/22 閲覧）
図 4　筆者撮影
図 5　googlemap ＋筆者加筆

■獲得資料

明石信道関連

- 明石信道「内藤多仲先生という先生」『建築界』19 号 .1970 年 10 月
- 明石信道「内藤多仲先生と私」『明石信道作品集』「明石信道作品集」刊行委員会『明石信道作品集』新建築社、1989 年
- 明石信道「映画館設計ノート (1)-(19」『映写技術リポート』
- 明石信道「劇場･映画館設計要項 (1)-(21)」『映写技術リポート』
- 明石信道『豆本「海峡」商売にも文化』【ボウニ】森屋、1976 年
- 『旧帝国ホテルの実証的研究』展示会関連資料
- 森本貞子『女の海溝』
- 相田武文「明石先生を偲んで」『早稲田建築ニュース』1986 年 12 月
- 谷資信「明石信道氏を追悼して」『早稲田建築ニュース No.19』1987 年
- 武元雄「明石信道氏を追悼する」『新建築』1987 年 1 月号
- 長谷川堯「建築家としての明石信道」『明石信道作品集』新建築社、1989 年

武蔵野館関連

- 図面
- 写真
- 映画館パンフレット
- 新聞記事

新宿帝国館関連

- 新興キネマパンフレット
- 吉本興業資料

新宿区役所庁舎関連

- 図面
- 竣工パンフレット
- 建築工事概要
- 区議会史

安与ビル関連

- 図面
- 竣工パンフレット
- 関連新聞記事、安田善一インタビュー
- 工事記録

■参考文献

新宿区歴史博物館『新宿区の民族（3）新宿地区編』1993 年 3 月
新宿区歴史博物館『内藤新宿の町並みとその歴史』1991 年 3 月※一部
新宿区歴史博物館『ステイション新宿』1993 年 10 月
新宿区歴史博物館『新宿の歴史と文化』2013 年 1 月※一部
新宿区歴史博物館『新修 新宿区町名誌』2010 年 3 月※一部
新宿歴史博物館『新宿盛り場地図』新宿歴史博物館
班目文雄『新宿西口・東口・四谷あたり（江戸東京・街の履歴書』原書房、1991 年
西井一夫『昭和二十年東京地図』筑摩書房、1986 年
今和次郎・吉田健吉『考現学採集』』学陽書房、1986 年
今和次郎・吉田健吉『モデルノロヂオ』　学陽書房、1986 年
戸沼幸市 編著『新宿学』紀伊國屋書店 , 2013.2
佐藤忠男 , 登川直樹 , 丸尾定『新興キネマ : 戦前娯楽映画の王国』山路ふみ子文化財団 , 1993.3
新興キネマ社『新興キネマ』新興キネマ社 , 1931
映光社『新興キネマ』映光社、1933
昭和七年三月現在キネマ旬報社調査『全國映畫館録』キネマ旬報社 , 1932.5
吉本興行株式会社 [編]『吉本八十年の歩み 』吉本興行 , 1992.8
大阪お笑い総合研究所著『吉本興業の秘密』データハウス , [1994.4-5]
新宿区議会 編集『新宿区議会史』東京 : 新宿区議会 , 1997.5
新宿区『新宿区史 : 区成立四〇周年記念』東京 : [東京都] 新宿区 , 1988.3
新宿区総務部総務課 編集『新宿区史 : 区成立五〇周年記念』東京 : 新宿区総務部総務課 , 1998.3
キネマ旬報社 編『日本映画館・人名・商社録 . 1959 年版』東京 : キネマ旬報社 , 1959.1
根本隆一郎　編集『映画の殿堂新宿武蔵野館 』東京 : 開発社 , 2011.12
明石信道『豆本「海峡」商売にも文化』【ボウニ】森屋、1976 年
「明石信道作品集」刊行委員会『明石信道作品集』新建築社、1989 年
明石信道 文・実測図面 ; 村井修 写真『フランク・ロイド・ライトの帝国ホテル』建築資料研究社 , 2004.3
明石信道『旧帝国ホテルの実証的研究』東光堂書店 , 1972.9
橋本千代吉『火の車　板前帖』筑摩書房、1998 年
平井玄『愛と憎しみの新宿』ちくま新書、2010 年
渡辺克己『新宿、インド、新宿』ポット出版、2011 年
椎名誠『新宿熱風どかどか団』新潮社、2005 年
井野朋也『新宿駅最後の小さなお店ベルク : 個人店が生き残るには？』筑摩書房 , 2014.12
野坂昭如『新宿海溝』文春文庫、1983 年（実は途中）
新川實 著『二〇世紀華麗なる劇場・映画館の変遷』連合印刷センター (印刷), 2000.11
牛田あや美 著『ATG 映画 + 新宿 : 都市空間のなかの映画たち !』我孫子 : D 文学研究会 , 2007.12
木村毅 編『東京案内記』東京 : 黄土社書店 , 1951.10
今和次郎『新盤大東京案内』中央公論社、1929 年
新宿歴史博物館 編『琥珀色の記憶 - 新宿の喫茶店 : 回想の " 茶房青蛾 " とあの頃の新宿と 新宿歴史博物館特別展図録』新宿区生涯学習財団 , 2000
新宿区立新宿歴史博物館 編集『キネマの楽しみ : 新宿武蔵野館の黄金時代』新宿区教育委員会 , 1992.2
本庄慧一郎『新宿今昔ものがたり』東京新聞出版部 2010 年
種村季弘『楽しき没落 : 種村季弘の綺想の映画館』東京 : 論創社 , 2004.11
酒井潔『日本歓楽郷案内』東京 : 竹酔書房 , 1931.4
田沢竜次『東京名画座グラフィティ』東京 : 平凡社 , 2006.9
加藤幹郎 著『映画館と観客の文化史』東京 : 中央公論新社 , 2006.7
伴野三千良 [ほか著]『劇場・映画館』東京 : 彰国社 , 1962.3
木村毅『東京案内記』黄土社書店、1931 年
田辺茂一『わが町新宿』紀伊国屋書店、2014 年
泰永 麻希他『東京を舞台とした流行歌の歌詞にみる都市の空間イメージ』（2013 年）
清水本裕『昭和の歌謡曲のなかの東京』
大村麻衣子『人の残す絵画的記録の価値―堀潔の描いた東京の分析を通して―』（2011 年）（未読）
山田深『〈都市空間〉の語られる文脈と手法 一建築家による作品解説での く都市空間＞（』2001 年）
永山武臣 監修『松竹百十年史』東京 : 松竹 , 2006.2
『松竹九十年史』東京 : 松竹 , 1985.12
建築写真類聚刊行会 編『活動写真館 . 巻 2』東京 : 洪洋社 , 1926.6
高梨由太郎編輯『東都映畫館建築』東京 : 洪洋社 , 1934.5 →東京国立近代美術館フィルセンター
『" 文士万来 " 缶詰ホテル』日経新聞 1983 年 3/24